

三野町の淡水魚

淡水魚班（徳島県淡水魚研究会）

中野 晴夫*¹

1. はじめに

三野町に生息する淡水魚の調査を2002年7月21日から8月25日にかけておこなった。調査場所は、一級河川本流の吉野川と支流の大屋敷谷川、河内谷川、白井谷川、大平谷川、滝谷川である。調査地点を12カ所設定し、調査した（図1）。調査方法は、おもに潜水による目視観察によりおこない、水中ノートに記録した。投網、たも網およびトラップによる採集もした。また、地方名や漁業方法等について聞き取り調査を三野町漁業組合長西川和喜夫氏、原久夫氏、美馬町漁業組合仲勝正氏からおこなった。

2. 調査結果

生息が確認できた魚種は、10科25種であり、次のとおりである。アユ、アマゴ、ウグイ、カワムツB型、オイカワ、ニゴイ、ギンブナ、カマツカ、タカハヤ、コイ、タイリクバラタナゴ、シマドジョウ、ドジョウ、マナマズ、ギギ、メダカ、ウナギ、カムルチー、オオクチバス、ブルーギル、カワヨシノボリ、シマヨシノ

ボリ、オオヨシノボリ、ドンコ、マスの一種である。

これらはおおむね徳島県で記録されているものであるが、マスの一種については、原田久夫氏や仲勝正氏からの聞き取りによって得られた情報に基づき、標本が手に入らなかったために同定できなかったものである。彼らによると、この魚は10年程前から白色をした体長30cmほどのものが吉野川のハイナ



図1 調査地点 No.1～No.12は調査地点および調査水域を示す。

*1 徳島県立城ノ内高等学校

ワ漁や刺し網漁にかかってきている。体の幅がやや広く、体色が真っ白とのことである。採集されるのは年間1個体程度であり、生息数は多くはないと思われるが、記録しておく。

今回の調査で記すべきことは大屋敷谷川、白井谷川、河内谷川の細流には徳島県版レッドデータブック（徳島版レッドデータブック掲載種選定作業委員会編、2001、以下県版RDBと呼ぶ）では準絶滅危惧種のタカハヤが多く生息していることである。タカハヤが生息している場所は水深10cmから30cmほどであり、瀬と瀬の間の小さな淵になっている場所である。水質のきれいな場所に生息している。タカハヤは群れをなして、体長12cmの成魚から体長2cmの幼魚も多くいた。またアマゴも個体数は少なく、幼魚ではあるが、大屋敷谷川、白井谷川に生息が確認できた。

アユカケは県版RDBで準絶滅危惧種になっているが、聞き取り調査によると三野町域の吉野川には30年程前から姿をみかけることはなくなっている。県版RDBではアユカケについて、「昭和30年代頃までは中流域の池田町や川島町まで遡上していたが、現在ではほとんどの個体は石井町の第十の堰直下に留まっており、ごくわずかの個体が吉野町の柿原堰下に達することができる程度のものである」としている。今回の調査でも、三野町域の吉野川本流4地点について潜水調査を行ったが確認できなかった。

水田近くを流れる滝谷川は富栄養化が進んでおり、オオクチバス、ブルーギル、タイリクバラタナゴなど外国からの帰化した魚種が生息している。トラップにより、ブルーギルは2個体採集したが、体長は10cm程の幼魚であった。オオクチバスとともに、今後増えすぎないように気をつけなければならない魚である。

聞き取り調査で、地方名及び川魚の漁獲方法や食べ方も調べた。淡水魚は地方名でもいろいろと呼ばれていて、オオクチバスのことをブラックバスという。オイカワのことをハイ、またはジャコという。タカハヤのことをヤマセコ、カワムツをゴジュウバイ、カマツカのことをエッシュ、ウグイのことをイダ、シマドジョウをササドジョウ、ブルーギルをチカダイ、ドンコの大きいものをゼニゴ、ヨシノボリのこ

とをジンズクという。アユの漁はカンドリ船でおこなわれ、友がけ、コロガシ漁がおこなわれている。毛バリで釣る方法は、吉野川のアユは学習して食いつかない。刺し網、投網による漁もおこなわれている。昔よりアユ漁に利用されているカンドリ船は吉野川の流の速さに対応した船であり、前後どちらにもすぐに進めるように工夫された船である。

3. 各地点での調査結果

調査地点1（図2）

大平谷川の上流地点で直径2m程もある大きな岩があり、その間を少しの水が流れている。そのたまり場で、水深20cm程の水の中に、体長10cmから12cmのタカハヤが3個体生息していたのみであり、他の魚種は生息していなかった。



図2 調査地点①

調査地点2（図3）

白井谷川の上流地点で、川幅1m程である。兩岸は樹木で覆われている。水深20cmの水たまり場であり、上から湧水が流れている。川底は大きな岩盤からなり、その上にレキが堆積している。体長10cmのアマゴが1個体いた。タカハヤが多く生息していて、体長が2～3cmのものが、30個体の群をなしていた。体長10cmの成魚も5個体いた。体長7cmのカワヨシノボリが1個体いた。

調査地点3（図4）

大屋敷谷川の中流である。川幅2mあり、水深は20cmで、深い場所では30cmある。兩岸にはツルヨシ

がしげっている。体長15cmのアユが2個体いた。体長5cmから7cmのアマゴが7個体いて、群れで泳いでいた。タカハヤが多くいた。岸近くのツルヨシの付近に体長2cmから4cmのタカハヤが20個体の群をなして泳いでいた。体長7cmの成魚も7個体いた。カワムツも多くいて、体長2～3cmの幼魚が50個体いた。成長ができている大切な場所である。体長12cmの成魚も5個体いた。体長4cmのカワヨシノボリがいて30cm四方の面積に3個体の割合で岩盤状の部分に生息していた。この地点は魚種が多いが、人が川遊びをしていて、魚を水中鉄砲で漁獲していた。魚も大切に保護していきたい場所である。



図3 調査地点②



図4 調査地点③

調査地点4 (図5)

河内谷川で水を貯めている場所である。深い所では、水深は4mある。全長が3mもある水草のエビモが生い茂っている。その中を体長2cmのカワムツ幼魚が多く生息している。体長30cmと20cmのコイの栽培品種であるニシキゴイが2個体いた。体長12cmのギンブナ20個体が群れをなして、泳いでいた。



図5 調査地点④

調査地点5 (図6)

道路に沿った部分であり、川幅が3mあり、片岸はツルヨシ群落になっている。水の透明度はよい。水深は深い場所では1mある。体長3cmの幼魚のタカハヤが多くいる。少し深い場所には体長3cmのカワムツ幼魚が多くいた。体長3～10cmのカワヨシノボリがいた。河底は20～30cmの石が多い。その間にレキや砂が多い。

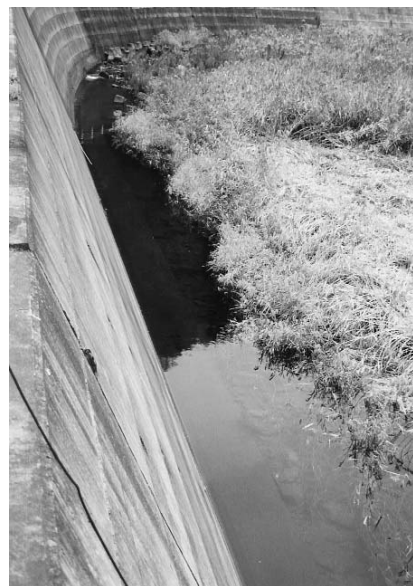


図6 調査地点⑤

調査地点 6 (図7)

加茂野宮の紅葉温泉に繋がる滝谷川で水田のある場所である。両岸が2mのコンクリートで保護されているが、川底は直径2～5cmの小石があり、大きな岩には藻類が付着している。水深は10cmである。体長10～13cmのオイカワが15個体の群れをなしていた。体長3cmのメダカが20個体の群をなしていた。



図7 調査地点⑥

調査地点 7 (図8)

水田に必要な水を確保するための用水路のような役目をしている川である。透明度はあまり良くなく、オオカナダモが生い茂っていて優占種である。体長12cmのオオクチバスが1個体いた。体長3cmのメダカが多くいる。川底は泥であり、所どころに直径20cmの岩がある。川の表面にはミズスマシが多く泳いでいる。



図8 調査地点⑦

調査地点 8 (図9)

コンクリートの橋があり、その橋を境にして、川下にはホテイアオイが生い茂っている。川上にはオオカナダモが繁茂している。水深は30cmある。水の透明度は良くなく富栄養化している。メダカの体長7cmのものが15個体いた。15cmのオイカワが8個体の群をなしていた。オオクチバスの体長30cmと25cmのものが2個体いた。オオカナダモの付近には体長5cmの幼魚が5個体いた。この場所にはルアー釣りによく人がきている。ホテイアオイのある場所に練り餌を入れたトラップをしかけておいた。3時間放置後、川からトラップをあげると体長10cmのブルーギルを2個体捕獲することができた。水中を水中メガネで観察するとタイリクバラタナゴが20個体、体長15cmのオイカワの雄が1個体、体長5cmのギンブナも2個体確認できた。体長40cmと30cmのコイが2個体いた。ニゴイの体長5cmの幼魚が1個体いた。



図9 調査地点⑧

調査地点 9 (図10)

吉野川の本流である。潜水調査をして、水中を水中めがねで観察した。水深は岸近くは50cmあり、中央から南岸へ行くほど深くなる。川底は直径30cmの石が多くありレキや砂である。水の透明度はよい。オイカワとカワムツB型の体長3～5cmの幼魚200個体程の群がいた。砂の場所には、体長15cmのシマドジョウがいた。体長20cmのウグイが2個体いた。2m程の岩がある場所には、体長25cmの大きなドンコが1個体身をひそめていた。体長10cmのニゴイが2個体いた。体長12cmのアユが5個体いた。体長10cmのカワヨシノボリは個体数は少ないが、単独でなわばりをもって生息している。



図10 調査地点⑨

調査地点10 (図11)

吉野川本流にあたる。瀬になっている場所にツルヨシがはえていて、水流が早い場所である。アユが多く、体長20cmのものが20個体の群をなしていた。オイカワの個体数が多い。美しい色をした体長15cmのオイカワの雄も3個体いた。体長12cmのカワヨシノボリもいた。体長10cmのカマツカと体長7cmのカワムツが、それぞれ1個体確認できた。体長12cmのシマヨシノボリが5個体群っていた。ツルヨシのある場所では、体長5から12cmのシマドジョウが5個体いた。体長5cmのニゴイが1個体いた。



図11 調査地点⑩

調査地点11 (図12)

吉野川の本流で、カンドリ船の船着き場になっている場所である。北岸は瀬になっていて水の透明度はよい。水深は30cm程であり、中央部へ行くにつれ深くなっていく。水の流れは穏やかである。オオカナダモのはえている場所がある。体長15cmのオイカワの個体数が多く100個体程の群をなしていた。アユは中央部分に体長15cmのものが50個体程の群をなしていて個体数

は多い。体長25cmのニゴイが1個体いた。オオカナダモの中に体長10cmのニゴイの幼魚もいた。体長25cmのギンブナが3個体いた。また、体長5cmの幼魚も3個体いた。砂場には体長12cmのシマドジョウがいた。瀬の早い場所には、体長13cmのウグイが2個体いた。岸付近には体長12cmの大きなカワムツが20個体いた。



図12 調査地点⑪

調査地点12 (図13)

吉野川本流に架かる角ノ浦潜水橋付近である。少しワンドになっていて水深が10cmある場所では、体長2cmのオイカワやニゴイの稚魚の個体数が多いて成長している大事な場所である。シマドジョウの体長13cmの個体が5個体いた。体長13cmのアユが1個体いた。体長5cmのカワヨシノボリが3個体いた。体長30cmに及ぶマナズが1個体いたが死んでいた。体長40cmのギギが1個体いたが、釣り針で傷がついており瀕死の状態であった。オオクチバスは体長5cmの幼魚が岸付近にいた。体長5cmのギンブナが1個体いた。水深の浅い流れの緩やかな場所で幼魚が育っているが、水深の深い場所には魚の姿は見えなかった。南岸へ行くにつれ水深は深くなっていく。



図13 調査地点⑫

4. その他

カンドリ舟（図14・15）は古くから、徳島県内の河川で使用されてきた鮎漁用の舟である。底が浅く平らになっている。そのために浅瀬でも進むことができる。幅が狭いので、水流がある場所でも進むことができる。また、へさきがそり、水流にあたる部分が少ないので、流れに逆らったり、急流にもまれても安定を保つことができるようになってきている。特にともが高くそっている。カンドリ舟を使用した鮎漁の風景は吉野川等の風物詩といえる。近年強化プラスチック舟の普及により、昔ながらの川舟の姿は消えつつある。この舟作りに、50年近い経験をもつ舟大工の原久夫氏等が三野町にいる。

吉野川で獲ったアユの料理方法としては塩焼きや酢付けが多く、祭りの時に寿司にして食べている。かつてはシマドジョウやカマツカなども焼いてたべることがあったが、現在は食べることはない。



図14



図15

5. 考察

生息する淡水魚の種類を生物指標として、水質を判定することができる。『横浜の川と海の生物 第8報・河川編』（横浜市環境保全局、1998年）より引用して表1にした。指標生物種のギギ、シマドジョウ、ウグイ、タカハヤが生息する場所は、水質がきれいな場所である。調査地点の吉野川本流はギギ、シマドジョウとウグイが生息しているの、水質はきれいと判定することができる。また、調査地点1から3と5はタカハヤが生息するので水質はきれいと判定することができる。約50年間、川漁師を吉野川でしている方の話によると、最近の水質がきれいになってきているとのことである。その原因として、ダムの濁りが減少していることや洗剤や除草剤使用の減少があげられる。

表1 淡水魚による河川の生物指標（上流ー下流）

指標種	きれい	やや汚れている	汚れている	非常によごれている
ギギ	←			
シマドジョウ	←			
ウグイ	←			
カマツカ	←			
オイカワ	←			
ドジョウ	←			
フナ類	←			

文 献

- 伊藤猛夫他（1962）：吉野川水系のアユを主体とした魚類の生態と漁獲量の推定、徳島県内吉野川水系漁業実態共同調査会。
- 中国四国農政局四国東部農地防災事業所（編）、吉野川水産資源影響調査委託業務報告書 平成8年度版、平成9年度版、平成10年度版、平成11年度版、12年度版。
- 横浜市環境保全局（1998）：横浜の川と海の生物（第8報・河川編）、pp.18-19。
- 徳島県版レッドデータブック掲載種検討委員会（2001）：徳島の絶滅のおそれのある野生生物—徳島県版レッドデータブック、p.77。
- 日本水産資源保護協会（1998）：日本の希少な野生水生生物に関するデータブック、pp.168-169。

別表 三野町の淡水魚 (かっこ内は地方名)

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

真口亜綱 TELEOSTOMI

サケ目 Salmoniformes

キュウリウオ科 Osmeridae

アユ *Plecoglossus altivelis* (図16)

サケ科 Salmonoidae

アマゴ *Salmo (Oncorhynchus) masou macrostomus* (アマゴ) (図17)

マスの一種

コイ目 Cypriniformes

コイ科 Cyprinidae

ウグイ *Tribolodon hakonensis* (イダ) (図18)

カワムツB型 *Zacco temmincki* (ゴジュウバイ) (図19)

オイカワ *Zacco platypus* (ハイまたはジャコ) (図20)

ニゴイ *Hemibarbus barbus* (図21)

ギンブナ *Carassius gibelio langsdorfi* (フナ) (図22)

カマツカ *Pseudogobio esocinus* (エッシュ) (図23)

タカハヤ *Phoxinus oxycephalus jouyi* (ヤマセコ)

コイ *Cyprinus carpio*

タイリクバラタナゴ *Rhodeus ocellatus ocellatus*

ドジョウ科 Cobitidae

シマドジョウ *Cobitis biwae* (ササドジョウ) (図24)

ドジョウ *Misgurnus anguillicaudatus*

ナマズ目 Siluriformes

ナマズ科 Siluridae

マナマズ *Silurus asotus* (ナマズ) (図25)

ギギ *Pseudobagrus (Pelteobagrus) fulvidraco*

ダツ目 Beloniformes

メダカ科 Adrianichthyidae

メダカ *Oryzias latipes*

ウナギ目 Anguilliformes

ウナギ科 Anguillidae

ウナギ *Anguilla japonica*

スズキ目 Perciformes

タイワンドジョウ科 Channidae

カムルチー *Channa argus* (タイワンドジョウ)

バス科 Centrarchidae

オオクチバス *Micropterus salmoides* (ブラックバス)

ブルーギル *Lepomis macrochirus* (チカダイ) (図26)

ハゼ科 Gobiidae

カワヨシノボリ *Rhinogobius fiumineus* (ジンゾク) (図27)

シマヨシノボリ *Rhinogobius* sp.CB (ジンゾク)

オオヨシノボリ *Rhinogobius* sp.LD (ジンゾク)

ドンコ *Odontobutis obscura* (大きなものをゼニゴと言う) (図28)



図16 アユ



図17 アマゴ



図18 ウグイ幼魚



図19 カワムツB型



図20 オイカワ雄



図21 ニゴイ

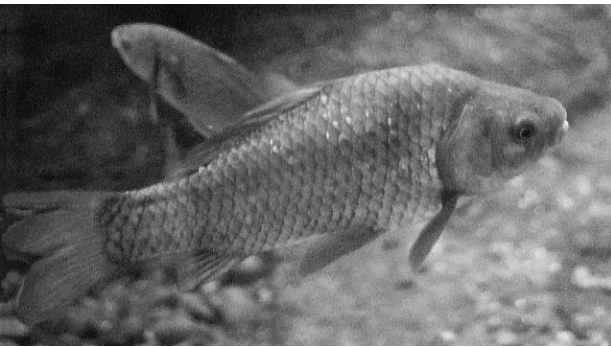


図22 ギンブナ



図23 カマツカ



図24 シマドジョウ



図25 マナマズ



図26 ブルーギル



図27 カワヨシノボリ



図28 ドンコ